

## 阿位八幡宮の押輿神事

阿位八幡宮は下何井一四一七（八幡）にあり、主祭神は誉田別命

（ほむたわけのみこと・応神天皇）・比咩大神（ひめのおおかみ）・息長足姫命（おきながたらひめのみこと・神功皇后）の三神であり、境内社は、金屋子神社・天王社・武内神社・伊勢神社・稲荷社・祖霊社の六社である。

この神社は、堀河天皇の御代寛治四年（一〇九〇）佐野源五延宣が奥湯谷尻に居を構え、（ここが今呼んでいる米山城）この六年後永長元年（一〇九六）八月、山城国（京都）石清水八幡宮の分霊を自分の居宅附近に勧請し、現宮司福島家の祖先、坂上元則をして祭祀にあたらせたのが始まりという。

いつの頃か不明であるが、宮の山・宮原・神の山の三ヶ所に分社されていたと伝えられ、又この三社が一社にいつの頃か合祀されたとも伝えている。その後、文禄二年（一五九二）毛利宰相大江輝元（毛利輝元）が現在地に社殿を建立している。（棟札あり）

この神社の奇祭とされる神事が押輿（押し輿）がなまって「おしこう」となった。である。この神事は「三社を一社に合祀するときの宮の位置」をめぐって、それぞれの地域の人々が自分の所に宮を置くことを主張しあった宮の奪い合いが「押輿祭」の起源と云われている。この神事は宮本殿前の広場から下の広場に押輿宮を落とし、下で待つ氏子が受け止めて、自分の地域に向かって押し合うものである。

秋の例大祭は十月一日と二日に行われ、初日の一大イベントが押輿

神事である。午後二時になると八名の神官によって祭礼が執り行われ、和服や背広姿の人たちが宮の石段を登ってお参りに来る。その中に、緋の着物につっかけ履き、首から手拭をぶら下げ手には米袋を持った男たちが混じる。この男たちが押輿神事の参加者であり、資格は氏子もしくは地区外に出ていても氏子の家に生まれた男だけである。

神事は四時に始まるが、それに先立って本殿の前に並んだ祭礼宮と押輿宮の前で湯たてが行われ、神官によって御神霊を両宮に移す。このころになると緋姿の男たちは下の広場に集まってくる。宮より奥のものは奥に向かって、手前のものは宮下に向かって対峙する。

やがて集団が石段下の中段広場に寄ってくる。宮を投げ落とす祭事番四人は重たくても二〇〇キロの宮を持ち続けなければならない。両者互いの掛け合いが最高潮に達した時、押輿宮が祭事番の手を離れ、高低差二メートル、十段ほどの石段を勢いよく転がる。中の広場で待つ氏子たちは落ちてくる宮の動きに合わせて一斉に宮を取り囲み押し合いをはじめめる。

二〇分余りの押し合いの後、行司役の頭屋が神幣を掲げて集団の背中をよじのぼり、肩を踏みながら頭上を越えて押輿宮の上にとどり着き神幣を振る。これで勝負あり。勝った方は勝鬨の拍手をし、負けた方は相手の勝利を称える拍手を贈る。

五穀豊穰を祈っての神事であるが、年一度の氏子の大事な交流行事でもある。

